

芦屋ゆかりのスポーツ人物像⑤

えんどう さ ゆ り
遠藤小百合

女子カヌーの先駆者



「2000年シドニー五輪 レース中」

1996年(平成8)米・アトランタ五輪、2000年(平成12)豪・シドニー五輪と2大会連続出場の快挙。アトランタでは、日本女子として初めて準決勝へ進出。

1975年(昭和50)生まれ。県立神戸高等学校出身、筑波大学卒業。

●阪神間モダニズム

「青い山、光る海」神戸・阪神間ほど山と海に恵まれた都会は珍しい。ヨット、ボート、カヌー等マリンスポーツが盛んなのも、こんな自然に恵まれているからである。神戸・阪神間のマリンスポーツは明治初期に始まる。欧米人たちのスポーツクラブ、神戸レガッタ&アスレチック・クラブが、その源流である。彼らの生活スタイルと神戸・大阪の財力が、「阪神間モダニズム」と呼ばれる生活スタイルを生み出した。カヌー等マリンスポーツは、その好例である。

●目標はオリンピック出場！

カヌー競技には様々な種目がある。大別してスプリント、スラローム、ワイルドウォーターの3競技。遠藤小百合(旧姓、丸山)は高校時代、スプリント(1,000m, 500m, 200m)に取り組み、主として500mに出場。その距離・時間およそ2分、陸上競技の800m走に匹敵し、非常に心肺能力の高さが求められる。そのため厳しい練習が要求され、それは水上だけでなく陸上練習にも求められた。一番苦しい練習が砂浜でのダッシュ、それもインターバル方式。まさに「反吐(へど)が出る」とはこのこと。そんな苦しさで迷いが生じた頃もあったが、スペイン・バルセロナ五輪(1992年)に刺激を受け、「絶対、オリンピック選手になろう!」と心に誓った。華麗な戦績を引っ提げての筑波大学だったが、練習環境には恵まれなかった。茨城県内には珍しくカヌーの社会人チームがあった。強豪で知られるマルニ木工。当初、このチームで合同練習をと思ったが、授業の時間割とチームの練習時間帯とが合わず、断念。しかたなく毎週末、神戸へ帰り高校時代と同じく、武庫川女子大生らと共に練習に励んだ。だが、往復新幹線での出費は大きく、父母には迷惑をかけた。また、夏は高校時代と同じく瀬田川の流れて力をつけた。以後、順調に力を蓄え、大学1年次に1994年(平成6)8月メキシコシティ世界選手権、10月広島アジア大会、2年生では独デュースブルグの世界選手権。3年次には、ついに念願のアトランタ五輪(1996年)の切符を手にした。そして、日本の女子としては稀有の準決勝戦まで進出を果たした。

●「無事これ名馬」

「1996年アトランタ五輪
先頭が遠藤



初めての五輪を振り返ると、毎年の世界選手権とは全く違うムードだった。地元の役員・ボランティア等おもてなしの人たちも、そして参加選手にとっても、もちろん初めての舞台、緊張感は一層のもの。だが、どこでも寝られる、何でも食べられる性分、そして物怖(ものおじ)しない性格が、遠藤の強みだった。もう一つの強みは「無事これ名馬」。即ち、多くのカヌー選手が腰痛に悩む中、遠藤は一度たりとも腰痛を経験したことがない。カヌーを漕ぐ姿勢をアルファベットに例えるとL字型、つまり上半身を立て脚を伸ばして漕ぐ。しかし、このL字型が腰痛を引き起こす要因でもある。どうしても猫背になり易いからである。これに対し、遠藤はL字が型崩れしないのだ。正しい良い姿勢で漕ぐので腰痛が生じない。小学校時代から培ったバタフライが、カヌーの基礎体力に活かされているのだろう。「ラグビー五郎丸」で有名になったルーティン。何事にも動じない遠藤も、またルーティンを持つ。レース前日には、必ず荷物を整理し、バッグへきちんと詰め込む。万一、試合でアクシデントがあっても、自らの身の回り品を整理しておけば、誰に見られても恥ずかしくない。これはその準備である。武士が戦場へ出かけるのと同じ心境なのである。そしてレース当日、波しぶきが目に入らないようにツバの大きい帽子をかぶり、ドック(船台)の一番前から乗り込む。いよいよのスタート前、すくった手水を一口含む。これらが遠藤のルーティンである。



「98年アジア大会(バンコク)」銀メダルだが
99年が五輪予選となるため、2位で焦りを感じる。

こんな遠藤もスランプを経験している。1995年(平成7)1月17日の阪神・淡路大震災、これを筑波大学の寮で知った。TVで見た故郷、神戸・阪神間が完全に壊滅状態に陥っている。あの巨大な阪神高速道路が、完全に倒壊してしまっている。まったく信じられない光景だった。何度も家に電話するが、つながらない。何時間もヤキモキしたのを覚えている。やっと聞こえてきた母の声、通じた電話で父や弟の無事を確認できた安堵感、それは今でも思い出せるほどである。だが、しばらく経って自らに襲ってきたのは、自己嫌悪とでも言うのだろうか。神戸の人々、中でも中高生時代の友だちのこと。皆が住む家もなく、食べる物にも事欠く時、「自分一人が、カヌーにうつづを貫かしててイイのか」との自問だった。およそ3ヶ月、練習に身が入らなかった。スランプから立ち直った遠藤は強かった。1995年(平成7)の世界選手権、'96年(平成8)アトランタ五輪、'97年(平成9)カナダの世界選手権にも出場、'98年(平成10)バンコク・アジア大会では銀メダルを獲得。そして、2000年(平成12)のシドニー五輪にも連続して出場している。

●丸山家はカヌー一家

父・丸山一二(いちじ)は、茸合高校陸上部で棒高跳びの選手だった。しかし、腰を痛め大学ではカヌー部に転向、これが功を奏し活躍。卒業後も現役を続行、1987年(昭和38)の「沖繩国体」まで長らく現役を努めた。現役引退後は、各大学からの招聘に応えコーチをした。こんな父が、手塩にかけたのは、長女・小百合だった。カヌーを始めた高校時代から父は、小百合と共にまさに「二人三脚」で、練習に試合に臨み育て上げた。こんな父・姉の影響で、弟3人(一馬、孝二、良平ともに世界選手権出場)もカヌー選手として活躍、まさにカヌー一家である。



「シドニー五輪に応援へ来てくれた丸山一家」

●父の声は「天の声」

遠藤のカヌーへの挑戦は決して早くない、むしろ遅かった。父に連れられてカヌーに乗った記憶はほとんどない。小学校時代、年に1・2回乗ったぐらいで決して幼少期から始めたわけではない。小学校時代は、カヌー少女ではなく水泳少女だった。1年生からイトマン・スイミングスクールに通い、4年生からは選手コースに入った。バタフライが専門となり、そのまま中学校の水泳部へ所属。神戸市内では上位だったが、挑んだ近畿大会の100mバタフライは、歯が立たなかった。その後、県下屈指の名門校・県立神戸高校へ無事入学。入部クラブに迷っていた時、父が「1~2週間、カヌーをやってみるか?」と声をかけてきた。なんとなくその気になって西宮浜へ行ってみた。いざカヌーに乗ってみるとアラ不思議、転覆することもなく(ほとんどの初心者は転覆する)、まるで経験者のごとく、スイスイと進むことができ、「楽しくて、楽しくて、しかたなかった。」父がタイミング良くかけてくれた声が、今から思うと、まさに「天の声」だった。この時から遠藤小百合のカヌー人生が始まったのだった。

●西宮浜と琵琶湖の思い出

県立神戸高校にはカヌー部が無かったので、学校・担任に名義を借り各種大会に出場した。人生初の大会は、1991年(平成3)6月西宮・御前浜(夙川の河口)で行われた兵庫県民体育大会・高校女子の部。この部門の参加者は2名。そのまま石川国体(小松市木場潟カヌー競技場)に派遣された。日頃の練習は、父が武庫川女子大学のコーチをしていた関係で、西宮の御前浜へ通い、大学生とともに練習した。高校1年では歯が立たなかった腕前も、高2になると大学生と互角に戦えるようになった。高校時代の戦績は、国体優勝2回、高校選手権でも1位に輝いた。2年生の時、日本代表として世界ジュニア選手権にも出場している。夏の合宿は琵琶湖の瀬田川だった。ここは歌川広重の浮世絵「瀬多夕照」にも描かれ、瀬田唐橋(せたのからはし)として知られる景勝の地。だが合宿は、実に40日間にも及んだ。疲れ果てて見た建部大社・船幸祭の花火に癒されたことも、今では懐かしい。

●指導者として再出発

カヌー競技は川や海を舞台に行われ、そのため風の強弱・方角、川や潮の流れなど自然も計算に入れつつ勝負に挑む。それは、まさに人生の縮図のようなものである。人生設計として教師を目指し、筑波大学・体育専門学群に進んだ。かつての東京高等師範学校、総合大学としての筑波大学は、全ての学部でトップクラスを誇るが、伝統の体育学分野は日本一である。その筑波大学で選手生活を4年間続ける一方、卒論『カヌー競技におけるタイムとピッチの関係』を立派に仕上げ、文武両道を貫いて卒業。この思いを胸に教壇に立ってきた。県立芦屋高校カヌー部を立ち上げて早くも12年。クラブの訓えは、「文武両道と質素剛健」。クラブをするには、時間のやりくりを大切に、勉強時間を確保する。この点を常日頃から厳しく指導している。決して「カヌー馬鹿」になって欲しくない。また、クラブに伴う出費もバカにならない。艇やパドルの補修は、部員自らが行う。それは「質素剛健」、ムダな出費を抑え、モノを大切に扱う精神を養うためである。その証拠に、初代キャプテンたちが使っていた艇を今でも大切に使用している。部訓を活かし、やがて立派な人間として巣立って行って欲しいと願う。

●ママさん選手を夢見て

10年近い交際を経て大学時代の同級生・遠藤俊介と2005年(平成17)に結婚。現在は2人の子宝(4歳女子、小2男子)にも恵まれ4人の家族。しかしながら彼の勤務が東京で、日頃は母子家庭のような生活。娘を保育所に預け、息子を学童保育に迎えに行くのは、クラブ指導と相まってテンテコ舞いの忙しさ。ママさん選手も今はムリ。競技への復帰もいつのことやら、「夢のまた夢」かと考える今日この頃である。

(文責: NPO 法人神戸外国人居留地研究会事務局長

~県立芦屋高等学校教諭~ 高木 應光)

